

PICK UP MOVIE



© 3003 film production, 2019

金の糸

旧市街の片隅で私たちは語る。
信じて欲しい。壊れた過去も美しいと。

日本の“金継ぎ”に着想を得て。ジョージアの激動の時代を生きた女性監督ラナ・ゴゴベリゼが描く。

【2019年/ジョージア=フランス/91分】 監督・脚本：ラナ・ゴゴベリゼ
出演：ナナ・ジョルジャゼ、グランダ・ガブニア、ズラ・キプンゼ



ジョージア・トビリシの旧市街の片隅にある古い家で娘夫婦と暮らす作家のエレネは、79歳の誕生日を迎えたが、そのことを家族の誰もが忘れていた。娘は姑のミランダにアルツハイマーの症状が出始めたため、この家に引っ越させて、一緒に暮らすという。ミランダは、ジョージアのソビエト時代に政府の高官だった女性だ。そんなエレネの誕生日に、かつての恋人アルチルから数十年ぶりに電話がかかってくるが……。

【上映日程】 6/18~7/1 (休映：6/20、27)

ピアノ —ウクライナの尊厳を守る闘い—

【2015年/ポーランド/41分】 監督：ビータ・マリア・ドリギス

あの時、誰かがピアノを演奏していたんだ——

2014年2月、親ロシア派の政権に抗議する市民や学生が機動隊と対峙した「ユーロ・マイダン革命」。騒乱の真ただ中の首都キーウの独立広場で、音楽院の学生アントネッタがバリケードにされようとしていたピアノを救出した。厳寒の広場でアントネッタが演奏するショパンは人々の心をつかむ。そして世界的な作曲家・リュドミラ・チチュクや兵士のヴォロディミル、覆面の男ポードンも演奏に加わっていく……。

こちらもお見逃しなく！



【上映日程】 ~6/10 (休映：5/30,6/6)
【鑑賞料】 一律1,000円
その他通常通り

自分の過去と和解する

歳を重ねるにつれ、死は否応なく身近なものとなる。死について思いを巡らせたり、忘れてしまいたい辛い出来事が頭をよぎったりもする。そんな老齢期を、どう過ごしていったらよいのか。これはラナ・ゴゴベリゼ監督、91歳の時の作品だ。

主人公エレネは作家で79歳。ジョージアの首都トビリシの旧市街、両親の思い出の残る古びた自宅で、いまでも日々著作に取り組む。彼女の日ごろの慰めは、ベランダで育てている草木、中庭越しに見える向かいの住人たちとの交流、ひ孫娘との会話だ。杖が手放せず外出できない彼女は、車椅子生活の元恋人アルチルと時折電話でお喋りをする。

ジョージアは1921年から91年までソ連邦の傘下にあった。ソ連内での文化的統合が進むと、ジョージアの文化や言語を守ろうとする人々は厳しく弾圧された。エレネの両親も、そしてエレネ自身も、命の危機や苛酷な抑圧のなかを生き延びてきた。そんな重苦しかった過去の時間に、彼女は突然向き合うことになる。

それは、エレネの娘の夫の母ミランダが、アルツハイマーのせいで一人暮らしが無理になり同居することになったせいだ。彼女はソ連時代には政府高官だった。いわばエレネたちを取締る側にいたわけだ。エレネの心に、暗い記憶や怒りの感情がよみがえる。波乱の時代に人生の大半を過ごし、それぞれの理想を目指した男女3人。彼らはいま、思想や政治的立場の違いを越えて心を通わせることができるのか。それぞれの過去に折り合いをつけ、前を向いて生きられるのか。

この作品のタイトルは、監督が日本の伝統的な陶器の修復法「金継ぎ」に感動を覚えて、つけたのだという。古い陶器を大切に、割れてしまうと金を使ってつなぎ合わせ、頑丈で美しい姿に生まれ変わらせる。私たちは果して、過去という重荷のなかから、その奥に潜んでいるに違いない幸せや喜びをすくいあげ、つなぎ合わせることができるだろうか。

tamura shizue

田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からハウシャオシエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。